

【研究ノート】

「マルチレベルアプローチ」の理論と実践 —教育相談を中核とした日本版包括的生徒指導プログラム—

広島大学 山崎 茜

はじめに

本稿は 2018 年度地域私学振興支援事業の一環として実施した日本版包括的生徒指導プログラム（マルチレベルアプローチ、以下、MLA）に関する教員研修の理論的な枠組みと、その実践を紹介するものである。

「平成 29 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省，2018）によれば，小・中学校における不登校児童生徒数は 144,031 人（前年度 133,683 人）となっており，過去 5 年間を見ても増加している。いじめの認知件数，暴力行為発生件数といった指標を見てもいずれも減少しておらず，こうした状況へ有効な介入が実施されていない現状がある。このような中，中央教育審議会は社会や経済の変化に伴い，子ども自身でなく家庭や地域社会といった子どもが育つ環境が変容し，生徒指導や特別支援教育等に関わる課題が複雑化・多様化していることを挙げ「チームとしての学校」の体制を整え，教職員一人一人が専門性を発揮したり専門スタッフ等と連携したりすることで子ども達の教育活動を充実させることができると示唆している（中央教育審議会，2015）。

この答申を受けて文部科学省（2017）は「学校において組織的な連携や支援の体制を維持するためには，学校内に児童生徒の状況や学校外の関係機関との役割分担，SC や SSW の役割を十分に理解し，初動段階のアセスメントや関係者への情報伝達等を行うコーディネーター役の教職員の存在が必要である」とし，教育相談コーディネーター役の教員の指名・配置の必要性を示唆している。この報告では予防的な取り組みの重要性が指摘されているが，教育相談コーディネーターの職務内容として提示されているものはリスクを抱えた一部の児童生徒への集中的な支援に限定されたものであり，予防教育の視点は必ずしも強くない。しかし，不登校やいじめ問題等に適切に対応するには，支援ニーズの高い子どもに対する個別の心理的・福祉的支援に加えて，教育的支援をデザインし，全児童生徒対象に個人の社会的資質や行動力を高めたり，集団を育て子どもの社会性の育成を図ったりといった予防的・開発的な介入をコーディネートすることも必要であるが，具体的な実践はまだ少ない状況にある。

MLA は，このように子ども達のニーズに応じて包括的に教育相談・生徒指導を展開する海外の先進的なアプローチである包括的アプローチ（Comprehensive School Counseling and Guidance Approach，以下 CSCGA）を参考に日本の教育事情に合わせて，学級経営において子ども同士の人間関係を重視し学級を集団として育成することに重点を置いたプログラムとして修正をしたものである。今年度，本事業で行った教員研修はこの MLA に基づいて行った。本稿ではその研修を報告する。

マルチレベルアプローチとは

MLA は，アメリカをはじめ香港，台湾などで展開されている CSCGA を日本の教育現場に合わせて

学級集団の育成を重視したプログラムとして修正したものである。MLA では全ての児童生徒の全人的な発達を目標としており、心理的・社会的な発達をベースに、学業的・キャリアの発達を視野に収めた全人的な成長が目指されている（栗原，2017）。また、栗原（2017）は心理的発達が基盤となって社会性が発達するとし、健全で安定したパーソナリティの発達などの心理的発達を重視する教育相談と、規範意識や自律性などの社会的発達を重視する生徒指導は不可分に関連しているとしている。そしてそれらを統合的に理解して実践する上で、アセスメントによる子どもの状態の的確な把握が必要であることを指摘している。

また、CSCGA では子どものニーズに応じた3層の支援モデルが取られている。日本でも石隈（1999）が学校心理学の支援モデルとして一次的～三次的援助サービスという3層の支援モデルを示している。このモデルでは、一次的支援の対象は全ての子ども達であるが、二次的支援、三次的支援では援助ニーズを抱えた一部の子どもが対象となっている。一方 MLA では生徒指導の目的により介入が三層に分かれており、それぞれを一次的生徒指導、二次的生徒指導、三次的生徒指導、とされている。一次的生徒指導では、全ての子ども達を対象に「自分でできる力を育てる」ということが目的となる。二次的生徒指導でも全ての子どもを対象に「友達同士で支え合う力を育てる」と言うことが目的とされる。さらに三次的生徒指導では支援ニーズの大きい一部の子どもに対して「教師や専門家が中心となり支える」ということが目的となる。そして MLA では三次的生徒指導の必要性をなるべく最小限にするように、一次的生徒指導と二次的生徒指導の取り組みの充実が図られ、その上でなお困難さを抱える、三次的生徒指導が必要な子どもへの集中的な支援の提供がなされる。

このようにして、MLA では個人の成長を可能にする集団を作ることを中心に組み込まれる。そのような集団とは、集団の構成員が安心・安全を感じられるとともに、成長に向かえる目標志向的な集団である。そして子どもの全人的な成長のために、学校内のあらゆる場面や活動を活用して子ども達に教育的活動をしかけ、個の成長を図る。このような取り組みを可能にするためには取り組みに携わる教職員間で子どもの立場に立ち、子どもの抱えるニーズの理解が一致している必要がある。そのため、客観的で共感的な子ども理解（アセスメント）が行われ、的確な実践が行われる。

4つの主要プログラム

MLA の実践には学級集団の育成を意識した4つの基本プログラムがある。主に一次的生徒指導として個人の社会的資質や行動力の成長に焦点を当てた社会性と情動の学習（Social and Emotional Learning：以下 SEL）と主に二次的生徒指導として子ども達のつながりの力を活用し、集団の成長に焦点を当てた協同学習、ピア・サポート、そして一次的生徒指導から三次的生徒指導として個のニーズに応じてポジティブな行動への介入を通じて子ども達に価値的な行動を身につけさせることを狙いとした PBIS（Positive Behavioral Interventions and Support）の4つである。それぞれの概要を次に示す。

1) SEL：「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、社会性（対人関係）に関するスキル、態度、価値観を身につける学習（小泉，2011）」である。そして、核となる能力として (a)「自己への気づき、(b)「他者への気づき」、(c)「自己のコントロール」、(d) 対人関係、(e)「責任ある意思決定」という能力の育成をねらいとして実践されるもの（山田，2017）である。山田（2017）は、SELにより社会的スキル・感情的スキルの向上や向社会的行動の改善、問題行動・攻撃行動の減少、自己や他者、学校

に対する態度の改善、学力の向上といった効果があり、SELの実践は子ども個人に効果があるだけでなく、学校全体の健全な環境の確保にも間接的な影響があるとしている。MLAではSELを通して子どもの対人関係能力を育成することで、協同学習やピア・サポートがさらに効果的になると考えている。

2) 協同学習：これまでも様々な解釈や実践が行われているが、MLAにおける協同学習は「二一世紀型能力」の中でも「実践力」における人間関係形成能力、社会参画力、「思考力」におけるメタ認知・適応的学習力の育成を目指して行われており、「実践力に基礎づけられた思考力の育成を目指すもの（沖林, 2017）」である。そして協同学習は①相互の協力関係などコミュニケーションを促進する仕掛け、②個人の責任を意識すること、③ソーシャルスキル等のスキル教育のそれぞれを焦点化したもの（沖林, 2017）となっている。MLAの中ではSELにより子ども達は協同学習を進める上で有効なソーシャルスキルを学んできている。また、安心して安全な集団づくりがなされており、授業内でのコミュニケーションが円滑に進むことが、協同学習を進める上で重要となる。

3) ピア・サポートプログラム（以下 PSP）：子ども達の対人関係能力や自己表現能力等、社会に生きる力がきわめて不足している現状を改善するための学校教育活動の一環として、教師の指導・援助のもとに、子ども達相互の人間関係を豊かにするための学習の場を各学校の実態や課題に応じて設定し、そこで得たスキル（技術）をもとに、仲間を思いやり、支える実践活動（日本ピア・サポート学会, 2011）のことである。そして、この中で学校や友達のニーズを把握し、それを充足するための感性やスキルを訓練し、活動する一連のプログラムであり、実際に仲間へのサポート活動を行い、仲間を思いやり支える活動に取り組ませることで学校全体に支持的な風土を醸成する取り組みである。中林・栗原（2017）は、ピア・サポートの中で仲間から支援される体験を通して他者から支えてもらうことの信頼感や、人との交流の心地よさを実感し、他者信頼を体得することにつながるとし、そうした体験が子ども達の人格的成長を促しているとしている。このPSPでは、SELをベースとしてサポート活動に必要なスキルのトレーニングを行い、子ども自身がサポート活動を具体的に計画し、各自の計画に沿って仲間へのサポート活動を実践し、活動の振り返りを行い、うまくいった点や新たに生じた課題を検討するという一連のプロセスを円環的に展開していく。

4) PBIS：アメリカにおいてCSCGAを遂行するシステムのひとつであり、応用行動分析の理論に基づいたPBS（Positive Behavioral Support；積極的行動支援）を中心にしたものである（長江・山崎・中村・枝廣・エリクソン・栗原, 2013）。PBISは個人を変えるのではなく、その個人の周囲にある環境調整を行うことで、個人の反応に変化をもたらすアプローチであり、問題行動を減少させるための予防的な対応を重視したものである（長江ら, 2013）。また、問題行動を減少させるために有効な方法は罰や懲戒ではなく、ソーシャルスキル教育や、教科指導の工夫、行動に焦点化した介入、反社会的行動パターンに対する早期スクリーニングとアセスメント、学校全体での開発的な取り組みであるとされている（長江ら, 2013）。この意味でPBISは、MLAにおけるSEL（ソーシャルスキル教育）、教科指導の工夫（協同学習）、学校全体での開発的な取り組み（ピア・サポート）といった各実践プログラムと関連して全ての児童生徒に学習と行動の成功をもたらすことを意図している。

MLAではこの4つのプログラムを中心に、個が育つ集団を作り、子ども達の全人的な成長をはかっている。

今年度実施した研修プログラム

今年度、地域私学振興支援事業の一環として A 校（全 4 回）、B 校（全 3 回）の教員研修を行った。

A 校は創設 100 年弱の私立・共学の中高一貫校である。心の教育や国際教育にも力を入れており、子ども達の豊かな発達を目指した教育が行われている。一方で、生徒の気になる様子として自己肯定感が低い子どもが多いという課題が挙げられており、学校をあげて研修に取り組みたいというニーズがあった。B 校は同じく創設 100 年弱の私立・女子校の高等学校である。「心の教育」に重きをおき、社会に出て役立つ、社会人として必要な教養を身につけることを目指して教育が行われている。しかしこちらも生徒の自己肯定感の低さや、簡単に不登校になってしまう生徒の姿が課題として挙げられていた。

こうした課題を受け、子どもの自己肯定感の低さという心理的発達の課題に対応するため、研修の第 1 回目のテーマとして MLA のベースとなる子ども理解と、教育相談的な関わりについて研修を行った。また、子ども達の支え合い、思いやりの活動を通して自己肯定感の高まりが期待できるピア・サポートに関する研修を第 2 回研修会のテーマとして設定した。この研修会は立命館大学菱田準子教授を講師とし、A 校、B 校共通で行われた。A 校では全 4 回の研修回を確保できたため、協同学習についても研修を行った。また、PSP に関する研修においても協同学習の研修においても、子ども達の安心で安全な関わりを保障する SEL の必要性について触れている。そして最後に、学校の中に肯定的な雰囲気を作り、全教職員で一致した指導を展開するための PBIS に関する研修を行った。A 校、B 校共に今年度中に研修内容を生かした実践が十分に進んだ訳ではないが、子ども理解が深まった、授業に協同学習を取り入れてみようと思う、など研修内容には肯定的な感想が聞かれた。全体の研修プログラムを表 1 に示す。

表 1 H30 年度 地域私学振興支援事業における教員研修テーマ

	A 校		B 校	
	日程	研修内容	日程	研修内容
第 1 回	8/20	MLA 総論（教育相談的な関わりスキル）	7/23	MLA 総論（教育相談的な関わりスキル）
第 2 回	8/23・24	ピア・サポートプログラムの理論と実践		
第 3 回	10/26	協同学習	2/27	PBIS
第 4 回	11/27	PBIS		

「チームとしての学校」の実現に向けて

これまでに述べたように、子どもの問題行動等の背景は多様化・複雑化しており、「チームとしての学校」の必要性が示唆されるようになった。今後、「チーム学校」の動きが本格化する中で、専門職の常勤化や、専門機関との連携は益々増えていくと考えられる。しかし、栗原（2017）は専門職の常勤化が始まれば生徒指導や教育相談に関する問題が解決するわけではなく、教育を軸としながらも心理・福祉に通じてマネジメントの観点を持つことが重要で、教師がチームの中核に位置づかなければチーム学校が十分に機能しないことを指摘している。そして文部科学省（2017）では、このような役割を担う教員は「教育相談コーディネーター」として校務分掌に位置づく必要があることも示されている。

栗原（2017）はこれらを受け、MLA の研修プログラムの考案や実践を始めたのはチーム学校が提言される以前からであるが、目指していたのは教育相談コーディネーターの育成であり、チーム学校の実

現であったとしている。実際に、子ども達の実態を把握しながら校内外の諸所と連携し、教育相談を中核としながら一次的生徒指導から三次的生徒指導までを展開する MLA の実践や、その実践のコーディネートを担うミドルリーダーのあり方は、教育相談コーディネーターのロールモデルとなりうる。また、MLA の研修に取り組むことが教員間のチーム性の向上、子どもや保護者との信頼関係の構築、主体的な組織マネジメントへの参加機会の増加、価値や自己実現への動機付けの高まりと QOL といった効果が見られる（中林，2017）ことも示されている。MLA は今後のチーム学校の実現における1つのモデルケースとなり、混迷を極める子ども達の問題行動への対応の一助となることが期待される。

引用文献

- 中央教育審議会（2015）. チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf (2019年2月27日)
- 石隈利紀（1999）. 学校心理学 誠信書房
- 栗原慎二（2017）. マルチレベルアプローチって何ですか？ 栗原慎二（編） マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり—日本版包括的生活指導の理論と実践—（pp.8-24）
- 栗原慎二（2017）. マルチレベルアプローチは子どもを救い、教師を救い、学校を救う 栗原慎二（編） マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり—日本版包括的生活指導の理論と実践—（pp.150-153）
- 小泉令三（2011）. 『社会性と情動の学習（SEL-8S）の導入と実践』 ミネルヴァ書房
- 文部科学省（2017）. 児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～ 文部科学省
https://www.pref.shimane.lg.jp/izumo_kyoiku/index.data/jidouseitonokyousoudannjyuujitu.pdf (2019年2月27日)
- 文部科学省（2018）. 平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/_icsFiles/afieldfile/2018/10/25/1410392_1.pdf (2019年2月27日)
- 長江綾子・山崎茜・中村孝・枝廣和憲・エリクソンユキコ・栗原慎二（2013）. 米国における包括的アプローチに関する一考察—PBISの視察から 学校教育実践学研究, 19,73-82
- 中林浩子・栗原慎二（2017）ピア・サポート 栗原慎二（編） マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり—日本版包括的生活指導の理論と実践—（pp.150-153）
- 日本ピア・サポート学会（2011）. トレーナー標準プログラムテキストブック Version2 日本ピア・サポート学会
- 沖林洋平（2017）. マルチレベルアプローチ型の協同学習 栗原慎二（編） マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり—日本版包括的生活指導の理論と実践—（pp.50-61）
- 山田洋平（2017）. SEL（社会性と情動の学習） 栗原慎二（編） マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり—日本版包括的生活指導の理論と実践—（pp.38-49）

Theory and Practice of “Multi-Level Approach”: Japanese Comprehensive School Guidance and Counseling Approach

Akane YAMASAKI

This report is about the theory and practice of the Japanese comprehensive school guidance and counseling approach (CSGCA) called “Multi-level Approach (MLA)” in Japan.

Issues surround Japanese children may be similar to other countries, school violence, bullies, aggression, school refusal, etc. In addition to this, the backgrounds of Japanese children are becoming very complicated and diverse. Under this situation, Japanese government will take new actions called “School as a team”. This action aim to collaborate with some experts to intervene more effectively, and enable us to do this, the coordinator of school guidance and counseling plays an important role. MLA is one of the useful practice of the “School as a team” and school guidance and counseling coordinator.

MLA is 3-tiered school guidance and counseling approach like CSGCA, and it is clarified the objective of intervention of each tiers. The first tier applies to all students, and aims to train the students grow stronger. The second tier aim to build relationship through many activities like collaborative learning and peer support program which is also applies to all students. The third tier is for students with intensive support needs, and teachers cooperate to give support for them. In the approach, many interventions are developed based on the assessment of students and school needs. In Japan, there are only few practices of CSGCA, so MLA is effective for children’s school life, and teacher training is also important for the execution of MLA.